

MRSA 検出による抗菌薬投与について

○横澤 郁代,早川 直人,津久井 綾子,吉田 勝一,高橋 茜,石倉 順子,高橋 佳久
金子 心学(前橋赤十字病院)

【はじめに】医療関連感染を起こす代表的な菌である MRSA (Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*) は、院内で分離される耐性菌として最も分離頻度が高い。入院患者から分離される黄色ブドウ球菌の 50～70%を MRSA が占めているが、各医療機関で頻度は異なり、近年は院内感染対策の充実により減少傾向にある。MRSA 感染入院患者の疾患別にみた検出割合は、VAP（人工呼吸器関連肺炎）等を含む肺炎が 40%、菌血症が 20%、皮膚・軟部組織感染症が 10%、手術創感染症が 10%、尿路感染症が 5%程度であると言われている。当院でも耐性菌は、MRSA の検出数が一番であり、材料では喀痰が最も多くなっている。当院における抗 MRSA 薬の使用状況を含め報告する。

【対象】2010 年から 2013 年 7 月 15 日に、当院細菌検査室依頼検体から検出された MRSA 1,196 株を対象とした。解析は、SIEMENS サポート疫学統計ツールと WHONET5.6 を使用し算出した。

【検討】年別検出数、分離推移、病棟別検出数、検体別検出率の算出。喀痰から検出された事例で治療薬の検討をおこな

った。

【結果】総検体数における MRSA 検出率は、2010 年 1.83%、11 年 1.87%、12 年 1.62%、13 年(7 月 15 日まで)1.58%と 10 年と 13 年を比べると 0.25 ポイント減少した。新規患者数は、16～41 名/月で、継続患者数は、2～7 名/月であった。病棟別分離頻度は、0%～5.70%と病棟格差が見られた。検体別検出率では、4 年とも喀痰が 1 位であった。VCM 使用量は、年間使用量 2010 年 3,571 g、11 年 4,548 g、12 年 4,800 g、13 年(7 月 15 日まで)3,036g であった。

【考察】MRSA による院内感染が問題になってから 30 年近く経過したが、未だに、医療関連感染では首位であり感染対策に関わる医療人にとっても悩みは尽きない。当院は、抗 MRSA 薬の使用量が多く、その使用制限に関しては非常に苦慮している。2013 年 6 月に「MRSA 感染症の治療ガイドライン」が発行されたのを機に、抗 MRSA 薬の適正使用が出来るように細菌検査技師からも啓蒙を続けていきたい。

連絡先 027-224-4585(内 3211)

E-mail i-yokozawa@maebashi.jrc.or.jp